

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

母系社会の構造：サンゴ礁の島々の民族誌

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008405

第Ⅲ部

母系社会のゆくえ



縄引き（日本統治時代に入った運動会の種目）

9 伝統社会の変容

ミクロネシア、とりわけカロリン諸島に住む人びとが「外国人」の直接統治を経験するようになったのは、一九世紀末からのことである。本章では、ミクロネシア連邦トラック州で、西欧との直接接触が始まった一九世紀後半から現在にいたる百年間の経済的・社会的変化に焦点をあて、トラックの人びと、とくに若者の価値観の葛藤について述べる。前章までは、サタワル社会を中心に記述してきたが、ここでトラック社会をとりあげるのは、つぎの理由による。一つは、サタワル社会は一九五三年にキリスト教の受容によって社会変化を被ったが、それまでは「孤島」という地理的環境のもとで、「文明社会」との接触が少なく「伝統文化」を保持してきた。したがって、その社会は百年の歴史のなかでトラック社会にくらべ大きな文化変容を経験していない。二つめは、サタワル社会とトラック社会は、母系出自と妻方居住の方式で基本的社会集団を編成しており、土地所有の形態や食糧資源の利用体系を共通にし、また言語をはじめ、多くの基層となる文化要素を共有している。したがって、トラックの社会・文化変化を捉えることにより、サタワル社会で将来、生起するであろう変化を予測しうるからである。

文化変化をとらえる視点として、私は統治国の政策や貨幣経済の浸透といった外的影響だけでなく、

それらに対応するトラック文化の内在的特性を重視したい。つまり、異文化との接触・混交によってトラック人の行動を規定し方向づける価値の特性（エートス）⁽¹⁾がどのように顕在化したかをあきらかにすることである。

欧米との接触

マゼランがグアム島へ寄港して間もない一五六五年に、スペインの軍艦がトラックに到達している。その船はトラックの戦闘カヌーの襲撃をうけ、二人の乗組員を失った。これがトラック人とヨーロッパ人との最初の出会いである。一八世紀末から一九世紀後半にかけて、トラック海域の島じまに來航した船は九十七隻にもものぼる。それらの大半は食料資源の乏しいトラックの離島に寄っている。大きな環礁に囲まれたトラックに投錨した船数は十七隻である。そのうち、薪や水の補給を不可欠とする捕鯨船にたつては、わずか一隻にすぎない。欧米列強が中部太平洋に船団を送り、捕鯨事業にしのぎをけずった時代においてである。

それはトラックが欧米の船乗りたちに「恐ろしい島」(Dread Hogleu)とよばれ、敬遠されたからである。フランスの地理学者、デュモン・ドゥルビルは、一八三八年にトラック環礁内で海図作成の測量中、カヌーの大群に攻撃され島民数人を銃で殺害した。六年後、ナマコ交易でトラックを訪れたイギリス商船の船長、アンドリュウ・チェイネは、島民の襲撃をうけて六人の乗組員の命を奪われた。一八六一年には、トラック近海で難破したイギリス商船の乗員が、ボートでトラックに漂着した。ウマン島の

人びとは、彼らの所持品をことごとく奪い、彼らを幽閉した（以後、島名については図3を参照）。このような事件が相ついだため、捕鯨船の乗組員たちは、「異人歓待」の雰囲気のあるポナベ島やコシャエ島、トラックの離島へ立ち寄ったのである。⁽²⁾トラックの悪評は当時のヨーロッパに響きわたっており、それはチェイネのつぎの記述からもうかがえる。「トラック人は、相手が無防備な状態だとわかるとどんな船にでも攻撃をしかけるので、よく訓練し、武装した船でなければ、この群島を訪れてはならない」。⁽³⁾

一六世紀の不幸な出会いに始まるトラック人とヨーロッパ人との接触についての血なまぐさい話は、一九世紀後半にいたるまで数多く残されている。ここで、トラック人がヨーロッパ人に接したときの印象を紹介しよう。これは一九一〇年代にトラックのモエン島の老人から聞きとったものである。

「西北より一大怪物波を蹴りつつ来るあり。ある者はそれを鳥の大なるものならんとし、他は舟ならんという。鳥ならば空中を翔らん。船とせんか船体の一方に浮き木なし。甲論乙駁し時の経るまま、かの怪物は西北に近づけり。熟視すれば黒色の大船にして三本マストの帆に風を孕めり。暫時にして進行を止め、続いて小艇に数十人乗組み上陸せり。衆人怪物として森林に隠逃し一人として出するものなし。空に樹蔭より窺ひ視れば船員等は何物か物色するものの如し。既にして船員は一人の土人を見附け出し何言か喋々するも一も理解するなし。食物其の他雑品を与え放たれたり。帰りていわく、彼れ怪物にあらず人間なり。毛髪は赤く眼色は異様にして言語通ぜず。暫く彼等のなすところを見ん。兎に角我等を害するものにあらず。また、ひそかに窺へば敷物の如きもの（ズックにて造りたる天幕ならん）にて忽ち家を建て他の数人は大木の下に到り何物か振り上げ丁々と打下すこと数回にして、さしもの大木も大音を発し地に倒し、薪を作りしなり。斯くすること数回、衆顧みて垂涎に堪ず。この利器を得んと欲す

るも外人と未だ物々交換を為すを知らず。依りて夜に入り一丁の壮者挙て之を襲い船員を殺し、かの利器（斧）数本および大ナイフ若干を奪ひて山に深く隠れ居たり。その後何事もなきも、かの船は依然として同処に泊せり。土民等思えらく、之れ我等を恐れて上陸せざるならんと。海に入り漁をしつつありしに沖なる船上より怪音発し煙上れば漁人はたちまち海に倒る。一音又一音陸上の土人等其の何故たるを知らず。今にして初めて知る、小銃にて狙撃せられしことを……」。

この話の出だしは「今を去る幾年の昔」とあり、正確な年代は不明である。トラックの南東にあるモートロック諸島を一八二八年に訪れたロシアの船長リュツケは、島の人びとが鉄をすでもっていたと報告している。しかし、その鉄は釣り針、小刀、かみそりに利用されたもので、大型の斧ではない。まして、銃の存在は確認されていない。そのことから、前文で語られていることは、一九世紀の半ばにトラックで起った出来事とみなしてよさそうである。

伝統社会と若者の価値観

欧米人から怖れられていたトラック人の好戦的狂暴さは、外国人にたいしてだけでなくトラック人のあいだでも発揮されていた。それは村と村、島と島とでくりひろげられる戦争においてである。戦争は村や島間の領土、海域の侵略がおもな原因であった。

一九世紀末、トラックの人口は一万二千と見積られている。その人口密度は百二十五人（一平方キロ）に相当し、パラオ、ヤップ、ポナペの三〜四倍である。トラックの島は、その語源チューク（尖

った山」が示すように平担地が少ない。したがって、タロイモを栽培する湿地がなく、主食はパンノキの実に依存してきた。その実も一年のうち半年しか収穫できず、あとの半年の食糧は地下貯蔵したパンノキの実で充足してきた。また、トラックの十四島に人が住んでいるけれども、全島を統合する政治組織は形成されず、村が独立した政治・社会単位となってきた。このような生態・社会的条件のもと、領地拡大のための戦争が頻発したのである。

トラック社会で十五歳から三十五歳までの若者（男性）はアヌオンとよばれ、村の防衛や戦争を仕掛ける先兵としての役についていた。平常時であっても、生産活動に従事せず、海や陸の見張り、武器の製作・管理、他村の偵察などの任務をおっていた。彼らは、男子集会所で寝起きし、イタンとよばれる秘儀的知識を修得した長老から、武器の使用法、護身術、戦闘の陣形などを伝授されていた。実戦では、槍を持った若者が先鋒となり敵と対峙する。投石具で石を投げるのが宣戦布告である。それから、槍の投げあい、接近戦へと進み、棍棒やサメの歯つき武器でわたりあう。

トラック人の価値観によると、「良い男」とは「勇敢で強い考えをもつとともにもの静かで親切、寛容な」性格をそなえていることである。あらゆる社会状況で「勇氣」と「力」を発揮する男性はプアラとみなされ、もっとも高い名声をうる。戦争時には、戦を恐れない戦士になることが若者に期待されていた。「死ぬも生きるも男にとっては同じこと」ともいわれ、命を惜しまずに敵陣へ攻めこむことが、望まれる若者の生きかたであった。「真の男」は、ココヤシの葉髓を目に刺されても手で抑えたり、まばたきをしなかったといわれる。トラックの若者の勇敢さは戦闘にかぎらず、恋愛においても発揮される。思慕する女性に自分の勇気を示すため、腕や胸にナイフで傷をつけたり、火を押しつける。これは

真の男であることを相手に表わすことであり、男性に期待される行為であった。このように、勇敢さを公的に表現する行為と同時に、他方においてトラック男性には日常生活でその攻撃性を抑制し礼儀正しく人に接することも要求される。他人に丁寧で親切な態度はモソソノンとよばれ、「良い男」の評価基準になっていたのである。

プアラとモソソノンという、男性に期待された二面性は、今日でもトラック人が望む男性像である。それは、アメリカの心理学者が、トラック人にとっては「攻撃性を如何に抑制するかが重要問題である」とか、「攻撃性の表現とその抑制がパーソナリティにおける基本的対立である」と報告していることからもうかがえる。したがって、一九世紀に欧米人と接触したとき、トラックの若者がとった暴力的行動は、伝統社会で望まれていた男らしさの表現であったとみなすことができる。いいかえるなら、若者が島のように大きな船と鋭利な文明の利器を目にし、貢物もなく無断で上陸した異人から物を奪ったり、彼らを殺傷することは、トラック人どうしの戦争におけると同様、男の勇敢さ、攻撃的性格を公的に示すことにほかならなかったのである。

キリスト教と外国人の定住

村間の戦闘と欧米の船にたいする攻撃が起きていた一八八〇年代に、ポストン・ミッションの手によるキリスト教の布教が始められた。トラックの南東にあるモートロック諸島を訪れたトラックのウマン島の酋長アマットは、そこでの宣教師モーゼスの熱心な説教と島の開拓に感銘し、キリスト教に帰依し

た(表9参照)。彼はウマン島でも教会を建てて伝道するように依頼した。モーゼスに乗せたミッションの船は、一八七九年一二月にウマン島に着いた。モーゼスの活動についてウマンの一人の酋長は「野生のままの島民を訓化し、開墾耕作を教え汲々として怠らず全島民の尊敬を受け教化大いに見るべきものあり」と述べている。一八八四年には、トラックの四島に教会がおかれ、約六百人の信徒をえていた。⁽⁸⁾ギルバート諸島出身のモーゼスは、布教活動と同時に島にタロイモやキャッサバを導入し、パンノキの実だけに依存していた島の人びとの食料資源の増進をはかった。彼はトラックで一生を送るが、子どもがなかったので島の有力者の息子を養子にした。養子アチ・モーゼスは、伝道船に乗りハワイやサンフランシスコで教育をうけている。

スペイン統治下の一八八五年、ミクロネシア進出をはかったドイツは、軍艦をトラックへ派遣した。その目的はトラックの人びとを懐柔して土地を確保し、コブラ生産の事業を始めることにあった。ラバウル総督の命をうけた艦長ブルッデマンは、トラックの島じまの酋長に接見して国旗を手渡し、ドイツのために仕事をするように指示した。これはトラックの領有宣言を意味していた。このドイツの一方的な植民地化は、スペインとの間で紛争をひきおこし、ローマ法王の仲裁をおおいだ。その結果ドイツは、ミクロネシアの島じまでコブラの植栽事業および商業活動の自由が保証されたのである。その後、トラックにはコブラを買いつけ、鉄製品、布、銃器等を売るドイツ、フランス商人が住みついた。当時のトラックでは、島間および村間の戦争が多発しており、島民は武器の購入競争に走った。

一八九三年には、田口卯吉の南洋群島への経済進出に同調した森小弁がポナペを経てトラックに着いた。彼はコブラの買いつけと日本の商品販売を始める。⁽¹⁰⁾森によると、日本人や欧米人にたいするトラッ

ク人の態度は、キリスト教宣教師の教導論育により、島の人びとの鬭争殺奪はあるが外人には悪意なく、危害を加えることを慎んでいたとのことである。しかし一八九五一年ころになると、コブラ売上金でドイツ人や日本人の店からライフル銃や「熱い水」(アルコール類)を手にいれたことで、戦争はますます激化した。一方で、キリスト教への抵抗も強まり、伝統宗教にもとづいて連日連夜踊り狂う風潮も復興した。そのころの状況を森は、「島民は天性猛獐の性質のこととて動もすれば目前のために外人とて仮借せず、我らはしばしば危険の界に出入せしことあり。すでに、赤山白三郎君は酋長より護身銃を要求せられたけれども肯せざるため虐殺されその銃を奪われたり」と報告している⁽¹¹⁾。その事件を契機に日本人とトラック人との関係も険悪になった。トラックの女性と結婚した森でも、「柔順羊の如き島民も他日統禦の手を緩めば忽ち二十年前の猛獅の性に復ることなしとせず」と述べている⁽¹²⁾。森のこのような見方は、キリスト教の布教の進展を認めながらも、トラック人の攻撃的性格に手を焼いたことを物語っている。

ドイツ・日本時代

トラック人どうしの戦争やトラック人の在住外国人にたいする攻撃は、一八九九年のドイツ統治以降厳しく取り締まられた。事件をおこした主謀者は逮捕され、ポナペやラバウルへ護送・監禁された。ウマン島の二十五代目の酋長セティン⁽¹³⁾はポナペに送られた一人である。彼は敬虔なキリスト教徒で教化につとめ、島の人びとから信望を得ていた。ところが、モエン島の北部の村はドイツ人から武器を購入し

て周辺の村人を殺し、土地略奪をくりかえしていた。彼はウマン島がモエンの南部の村と戦時同盟を結んでいることもあり、無謀な北村を鎮圧すべく戦士を派遣した。セティンは戦争に荷担したことで、一九〇四年ドイツの軍艦に捕えられたのである。そのときドイツがトラックで押収したライフル銃は四百三十六丁、薬砲二千五百発を数えた。

ドイツ政庁は土地の個人登記を実施し、ココヤシの植栽とコプラの生産という経済政策を積極的に進めた。トラックの人びとは、初めて経験する外国人の直接統治により、コプラ生産労働者としての地位を余儀なくされた。¹³ 武器の購入と戦争が禁止されたトラック人は、酋長への初物献上儀礼などの機会に、村間で米、ビスケット、缶づめ、酒類の供出を競う祭宴に熱中したといわれる。つまり、トラックの男たちは、競争的贈与・交換の場において、攻撃性と寛容さを發揮していたのである。

日本時代になると南洋庁は、ドイツが着手・開発した経済基盤のもとに、農業・漁業の商業化、道路、港湾、通信、交通手段の整備、島の人びとの賃金労働経済の促進、教育制度の確立、そして日本からの農業移民の入植などの政策を実施した。島の人びとにも居住環境の改善、農漁業の技術指導を行うと同時に、委任統治の条項に従い飲酒その他の暴力的行為を厳禁した。軍政時代、フェーファン島の二つの村で武力的争いが起き、それらの酋長はみせしめのために日本軍の手で処刑された。その後、トラック人の武力抗争は一度もなかったといわれる。

日本の南洋庁による統治の主眼は、日本人の利益のために島を利用することであり、そのような統治方針からうけるミクロネシアの人びとの恩恵は二のつぎにおかれていた。¹⁴ 一九四〇年にトラックに住む日本人は四千を数え、当時の島民人口の二分の一に達した。日本人は邦人社会を形成し、島の人びと

全面的につきあうことはなかった。つまり、日本人社会と島の人びとの社会という二重構造のもとに植民政策が展開されていたのである。

ウマンの酋長伝承(表9)によると、一九一四年から四一年にかけて酋長をつとめたのは、前述したアチ・モーゼスである。彼は二十六代の酋長で、第一回の内地観光団員に選ばれた。一九一五年に東京横浜、大阪等を見物し、日本の発展ぶりに圧倒され、日本のために尽くすことを決心する。島に帰ってから、教会に学校を設けたり、島の道路や家屋の改善を進めた。一九二五年には、ほかの島に先がけ「冬島青年団」を組織する。この青年団は十八歳から三十五歳までの男性が加入し、公共事業に奉仕することを目的とした。日本の支庁がおかれたデュブロン島の庁舎、付属施設の建設、道路や波止場づくりに積極的に参加した。さらに、一九四〇年代にアチは山から海岸へと居住地の移転を実施する。ウマンの人びとにとって、海岸沿いに家を建てて住むことは「恐ろしい」ことと考えられていた。とくに、多くの女性は海の側に居を構えることに強く反対したといわれる。他の島からの侵入者に襲われやすいという理由からである。

長老は、日本統治時代、警察や巡警(南洋庁から任命された島出身の巡査)の取締りが厳しく、若者の暴力事件がほとんどなかったと話す。してみると、トラックの若者に望まれる勇敢さ、攻撃性はどのような形で表現されていたのであろうか。つまり、戦争、競争、競争的宴などの禁止によって若者が「男らしさ」を公けにできないという状況から生じうるストレスは、どのように解消されていたのかということである。

ストレスのはげ口の装置としては、青年団の組織化と村・島間および個人の競い合いを公的場で示す、

表9 ウマン（冬）島の酋長の論功伝承

代	年	首長名	業績と出来事
			〈以前省略〉
23		アウェン	<ul style="list-style-type: none"> ・村間の戦争が大きくなり、出兵して勝利を治め、島をまとめる。 ・N村が反旗をひるがえしたので鎮圧した。 ・ウーム（初物献上儀礼）を実施する。
24		アマット	<ul style="list-style-type: none"> ・北部の村の戦争を始め、各村から初物パンノキの実を献上させた。
	1879		<ul style="list-style-type: none"> ・モートロック（ナマ）島でキリスト教に改宗し、トラックで初めて宣教師を招く。
	1885		<ul style="list-style-type: none"> ・ドイツが来る。トラックの6人の首長にドイツの旗を渡し、ドイツのために仕事をするように命令する。
25		セティン	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人が初めてトラックに来る。 ・モエン島の村間で戦争が起き、南部の村に援軍を送る。 ・ドイツの統治となり、政庁をデュブロン島に決める。
	1899		<ul style="list-style-type: none"> ・ドイツ政庁が戦争を禁止する。戦争をした人をラバウルとボナベに進行する。セティンはモエン島の戦争に加わったので、ボナベの監獄に入れられる。
	1904		<ul style="list-style-type: none"> ・長老の話合いでセティンのかわりにアチが首長になる。
26		アチ・モーゼス	<ul style="list-style-type: none"> ・日本がミクロネシアに入る。軍政が始まる。
	1914		<ul style="list-style-type: none"> ・アチは日本のために仕事をし、「内地観光団」に選ばれ日本へ行く。
	1915		<ul style="list-style-type: none"> ・フェーフアン島の村で戦争があり、村の首長を処刑して戦争を禁じる。
	1921		<ul style="list-style-type: none"> ・軍政から民政に移る。 ・アチは教会で学校を開く。 ・ウマンの人はよく仕事をするので、デュブロン島の波止場や道を作るのに動員される。 ・アチは若い男と女を集めて「青年団」を作り、デュブロン島の支庁のまえで行進する。それで「勲章」をもらう。
	1927		<ul style="list-style-type: none"> ・モートロックの台風被害を直すためウマンの青年団を送る。それで支庁から勲章とお金をもらう。そのお金で青年団の制服を作る。 ・ウマン島に6箇所の波止場を作り、海岸沿いに道をつける。 ・山から家を海岸におろす。
27		イチロー	<ul style="list-style-type: none"> ・イチローは支庁で日本の法院の仕事をしていたので一年でやめる。
			〈以下省略〉

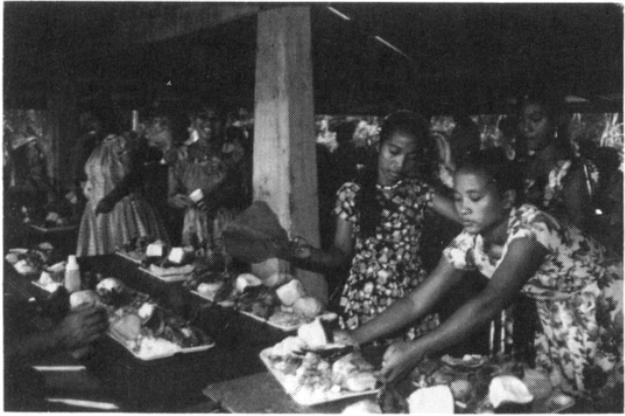
註 ウマン島の首長の論功伝承は、神話時代から現在までの歴代首長の業績とその期間に起った出来事を語っている。この伝承は私が一人の長老から1982年に採録したものである。

カヌー競技、運動会、農産物品評会、といった行事の普及にあった、と考えられる。青年団組織はキンロウホウシ（勤労奉仕）を目的としており、個人的行動を抑制するものである。カヌー競漕や運動会は、青年団が母体となり、他の青年団との緊張関係を強め、集団に属することで個人の存在が確認される。これはウマン島の酋長伝承に「ウマンの名をあげる」とか「ウマンが他の島の上に行った」と語られているように、トラックの男性文化に内在する「競争心」「攻撃性」「勇敢さ」を誇舞する指向性と一致する催しものである。また、品評会は個人の作った農作物を競うことで、個人の名声を得る場であった。

青年団組織は、軍政庁や南洋庁の指導で結成されたのではなく、伝統的な年齢集団を基礎に組織化されたものである。トラックではアヌオンとよばれる年齢階層が母体になっている。ウマン島の二十六代の酋長アチは、トラックで最初に若者の力を公共的事業のために結集させたが、ほかの島じまも相ついで青年団を結成した。南洋庁はそのような動きを推進するため、一九三〇年代から公学校の職員を指導者として「島民青年の知徳の向上、身体鍛錬、公共的奉仕等」につとめたのである。⁽¹⁵⁾したがって、トラックの若者の前述したストレスは統治者の政策によって抑圧されたのではなく、内的・自発的につくりあげた装置（団体組織）への加入によって解消されたのである。アチはその功績により、二度にわたり南洋庁から「勲賞」をもらっている。それは、ウマンの人びとにとっても誇りにすべきことであった。

現在のトラック社会

「金曜日の恵み」ということは、現在のエリート・サラリーマン（公務員）のあいだで流行して



パーティーの給仕をする娘たち

いる。⁽¹⁶⁾ 彼らの給料は毎月第二、第四金曜日に支給される。両日の早朝には、島じまから人びとがモーター・ボートや連絡船でモエン島に集まる。モエン島には飛行場があり、トラックの州政府がおかれている。政治と経済センターである。サラリーマン家庭には、タロイモ、ココヤシ、パンノキ、魚などのみやげを手にした多くの来客が訪れる。彼らは家にあがりこんでコーヒーを飲み、テレビを見て夕方までいつづける。

午後三時すぎ、サラリーマンは役所で給料チケットを貰い、銀行や商店で現金化して家へ帰る。彼は家に集まっている人には目もくれず、シャワーをとりおもむろに居間へ姿を現わす。彼の妻は来客の目的をすでに聴取しており、夫に耳うちする。来客の目的はお金の無心である。「どこそこで結婚式がある」、「教会への寄付金がある」などを理由に二十ドル、五十ドルとせびる。来客は、主人とその妻の父母や兄弟姉妹、父方、母方のオジ、オバなどである。彼らは農耕に従事しているが、コブラ一俵（五十キログラム）六ドルの値では、その売り上げ金は米、醤油、灯油等の生活必需品の購入で消えてしまう。とても交際費にまわす貯えはない。

「頼りになる」サラリーマンとはいえ、それらの要求にいちいち応じてはいられない。車やモーター・ボートのローンも残っている。五十代の男性で手もとに残る給料は百五十ドルくらいのものである。

それで一家の生活を支えなければならない。しかし、自分の学費、留学中の援助を彼らからうけた手まえ、むげに追いつき返すわけにもいかない。隔週の金曜日に、島の食べものがどっと集積しても、おおかたは腐ってしまう。せめて、「好まざる来客」が週に二度ぐらいの割で、みやげを持参して訪れてくれれば、サラリーマン家庭の食費の支えになるのだが……。

この情景は、トラックのサラリーマン家庭で給料日にくりひろげられるごく普通の出来事である。アメリカの教育をうけ、ハワイ、カリフォルニアでの学生生活をおくった若きエリートたちは、核家族の自立を理想としている。しかし、トラックの伝統的な家族・親族関係を無視するわけにはゆかない。「金曜日の恵み」とは、アメリカの経済援助に支えられた消費経済が浸透したミクロネシア社会で生活している、若きエリートの価値観の葛藤を如実に示している標語といえよう。

伝統家族と核家族

トラックの人びとは土地を人間の背骨にたとえている。これは土地を持っていない人は、「もう生きてはゆけない」ことを表している。トラック語で土地を指す言葉ファヌは、パンノキ、タロイモ田と礁湖を意味するとともに、そこからとれる「食べもの」をもさす。つまり、土地は食料資源の源泉であり、それなくしては生活できないと考えられているのである。トラック社会で土地を所有する集団は、母系出自にもとづいて形成される。三〜四世代前の女性を祖先とするその集団は、エテレケスとよばれる。それは先祖伝来のパンノキやココヤシの生えた土地、タロイモ田、屋敷地そして礁湖を所有する。

エテレケスの共有地の使用は、全成員に平等に認められるが、最上世代の年長男性（族長）が最終的処分権をもつ。そして、エテレケスの男性成員は、彼らの子どもに一定の土地を贈与・相続させる義務がある。したがって、子どもたちは母と父の双方の集団から土地を相続する権利をもつことになる。父親からの土地は、父親を同じくする子どもの共有するもので、エテレケスの土地とは区別され、彼らの判断で処分される。ただし、その土地にたいして大きな権利をもつのは、長兄である。

トラック社会の土地所有の単位は、母系出自集団（エテレケス）であるが、その集団の男性成員の子どもをも「準成員」としてふくむ柔軟構造を特徴としている。また、集団構成においても、父の集団から土地が贈与される慣行によって、母系出自集団内に、兄弟姉妹からなる「土地所有集団」ができていく。したがって、トラックの母系出自集団は、潜在的に兄弟姉妹を軸とする下位集団を形成し、分裂する構造にある。このような外的・内的構造をもつ母系出自集団は、経済的・社会的変化に応じて変質を余儀なくされる。その要因の一つは、今世紀初頭より始まるコブラの生産販売や日本統治以降、島の人が賃金労働者として現金を手にしたことである。もう一つは、一九五〇年代からの三倍にもおよぶ急激な人口増加である。

前者の貨幣経済の波及による影響は、現金収入のある人びとが他人から土地を購入するという状況を生み出した。トラック人の土地に対する愛着、つまり、「お金はなくなるが、土地は毎年食べものを恵んでくれるから、土地を絶対に手放してはならない」という考えは、市場経済のもとで生活する人びとの行動を律するだけの力がない。その日の食生活、家屋改造や船外機つきモーター・ボートの購入、子どもの教育のためなどの理由で土地が売買される。その結果、土地を所有しない男性（父親）層が出現

したのである。

第二の影響として、男性成員を多くかかえるエテレケスでは、彼らの子どもたちに集団の共有地を分割して贈与させることになる。そのため、現在では集団共有地をもたないエテレケスが大半を占めるようになった。この傾向は土地を所有する単位の縮小化をもたらし、兄弟姉妹間においても土地処分に関し強い権限をもつ長兄が、独断で父親からの土地を彼らの子どもに贈与する事態を引き起こしている。その結果、母系的社会関係の核をなしていた兄弟と姉妹の結びつきは弱くなり、父親と息子（子ども）の紐帯が強化されることになる。「姉妹の子どもと自分の子どもを天びん棒でかつぐ」というトラックの男性の生き方も意味をなさなくなってしまった。つまり、生産手段を共有するのはもはや、母系出自にもとづき姉妹が共住するエテレケスではなく、一人の父親を軸とするファミニ (family の借用語)、「核家族」である。

貨幣経済の浸透と人口増加による親族集団および家族の変質は、母系社会における男性の「経済的自立」と位置づけることもできよう。しかし、父親の土地と現金収入だけで生計をたてられる家族は少ない。男性はエテレケスの成員としての立場、姉妹の子どもの養育を受け持つ責任、父親の出自集団にたいする貢献など、伝統的な社会関係の網の目のなかで生活することが期待される。したがって、アメリカの教育をうけたエリート・サラリーマンであっても、自分の妻と子どもだけのファミニの生活を優先させることは不可能となる。このような、伝統的人間関係とアメリカ風の核家族の創出との板ばさみが、「金曜日の恵み」の示す現状にほかならない。

若者の飲酒と自殺

私は一九七四年からトラックで四度の調査を行ってきたが、若者の怠慢とそれにたいする大人の寛容さ、そして飲酒による暴力と近親者間での殺傷事件、自殺者の増加という現象を目のあたりにしてきた。それらの現象をトラック社会・文化と関連づけて把握することが私の大きな課題となっていた。

長老たちは日本時代を回想して、「酒を飲んでブラブラすることは許されなかったし、酒を飲んだことがわかれば監獄で叩かれ、喧嘩で相手を傷つけたら長いこと監獄に入れられた」。しかし、「働けば働くほどお金を貰えたし、野菜を作って日本人に売ってもお金になった。月に五十円はもらえ、それで夏（デュブロン）島で風呂敷に包んで手に持てないくらい品の物が買えた……」などと、今日のトラック社会と比較してくれる。

今の若者は「イワシになってしまった、働かなくてもアメリカが何かとプログラムをつくりお金をくれる、アメリカのおかげでトラック人は悪魔に心を売ってしまった」、などとアメリカ教育のもとで育った若者を批判する。「イワシ」は、若者が見さかしくなく酒に金をつぎこんで乱暴することを、頭のないイワシの缶づめにたとえた表現である。トラックでは「強い頭（考え）」をもつことが男性の生き方とされてきたからである。他方、若者は若者で、「日本人は日本人のためにトラックを占領して、島の人びとに何もしてくれなかった」とか、老人たちが日本時代を懐かしむのは、「英語を話せず今の時代に通用しない昔の人だからだ」などと反日感情をあらわにする。このような意見は、エリート役人から

も聞かれることがある。

日本の委任統治（一九二二年）以来禁止されていたミクロネシア人の飲酒は、アメリカの統治時代に解除された。トラックでは一九五九年にビールの販売・消費が許された。一九六〇年代にはいるとアメリカ統治領政府は、ミクロネシア全域で行政機関の拡充、教育・医療制度の確立などを進めた。その投資額は、一九六一年に七百万四千ドルであったが、一九七四年には八千万ドルにもなった。このような財政援助によって、政府の役人や教師などの公務員と賃金労働者の数が増加し、トラックでも人びとの現金収入の道はひろがった。それにもなつて、トラックの男性のアルコール類の消費も急増し、一九七六年から七七年の一年間で総輸入税額の三分の一を占めるにいたつた。

アルコールへの依存は、トラックの若者のあいだに暴力事件をひきおすことになる。現金を手にした若者が仲間をひきつれモエン島のバーで飲んでいるうちに、ほかのグループと口論、なぐりあいの喧嘩となり、武器で相手を刺したり、傷つける事件に進展する。村で酒を飲み大声でわめいたり、通りがかりの車を止めてガラスを割って近親者に注意されると、家のドア、壁、ガラス窓を壊す。さらには、兄や同世代のキョウダイから酒のうえでの暴力を叱責され、キョウダイをナイフや銃で殺傷する。このような若者の行動にたいし、トラック行政は、刃物や武器類のバーへ



モエン島は禁酒のため、沖合の船の上でビールを飲む若者

アルコールへの依存は、トラックの若者のあいだに暴力事件をひきおすことになる。現金を手にした若者が仲間をひきつれモエン島のバーで飲んでいるうちに、ほかのグループと口論、なぐりあいの喧嘩となり、武器で相手を刺したり、傷つける事件に進展する。村で酒を飲み大声でわめいたり、通りがかりの車を止めてガラスを割って近親者に注意されると、家のドア、壁、ガラス窓を壊す。さらには、兄や同世代のキョウダイから酒のうえでの暴力を叱責され、キョウダイをナイフや銃で殺傷する。このような若者の行動にたいし、トラック行政は、刃物や武器類のバーへ

の持ちこみを禁止した。しかし、若者の傷害事件はとどまることがなかった。警察もバーで暴れたものを逮捕し、数日間留置所へ拘束する戦法にでた。給料日の週末には警察へ連行される酒飲みは留置所におさまりきらず、警察の事務所にあふれるほどであった。その対策として一九七四年に警察で飲酒許可証を一年単位で交付し、それを持参する者のみが店での酒類の購入とバーへの出入りを許可された。しかし、前科者でも、許可証所有者が入手した酒を飲む自由は制限できず、その効果はいっこうにあらなかった。

モエン地区行政府は一九七七年に、モエン島内での酒類の販売と飲酒を禁止する案件を住民投票にかけた。ほとんどの女性と多くの老人の賛成をえて、翌年一月からモエン島での飲酒は禁止され、現在にいたっている。しかし、今日でもブラック・マーケットでの酒類の購入が可能で、飲酒による傷害・殺人事件は続発している。

トラックの若者が酒におぼれ、狂暴さを発揮する現象を、社会・経済変化に焦点をあてて把握することもできよう。たとえば、前産業社会における職場の不足、伝統的社会関係の変質、若者を組織化する団体の消滅という側面からの位置づけである。他方、個人の行動を規定し、方向づける価値の側面、つまりトラック文化と関連づけてその現象をとらえることも必要である。

トラックの一九世紀末までの伝統社会において若者は生業活動に従事することが期待されず、あらゆる社会状況において勇敢な「男らしさ」を発揮することに高い価値がおかれていた。現在においても、若者がパンノキの実の収穫・貯蔵やコプラづくりの作業に積極的にかわかわらず、数人の仲間とたむろしていても近親者から非難されることはない。アメリカの統治時代、飲酒が解禁になり、若者の自由も保

証された。アヌオンとしての自由を行使できる。そして、禁酒法施行下でも、若者が家で静かに酒を飲むことは大目に見られている。しかし、彼らの力、勇敢さ、攻撃性を公的に表現する場は存在しない。私は、トラックの若者のそのようなストレスのはけ口が飲酒行為になってきたと考えている。若者は酒を飲んで「大暴れ」し、サウ・シャカウ（酒を飲む知識の修得者）としての社会的承認をうることで、「真の男」へ成長したことを示すのである。アメリカの人類学者マック・マーシャルも、若者が酒に依存し、暴れるのはトラック文化自体に内在するストレスに対する対応のしかたであり、最近の文化変容によるものではないと指摘する⁽¹⁷⁾。

現在のトラックの若者がひき起こすもう一つの社会問題は自殺である。一九七一年から一九八三年のあいだの自殺者数は百二十九人にのぼる⁽¹⁸⁾。そのうち、十五歳から二十九歳までの男性自殺者は八十九人を数える。一九八〇年のトラック群島の人口は三万人、十五歳から二十九歳までの人口は約八千人である。トラックでの自殺件数が増加するのは一九六〇年代後半からである。私も一九八三年のフェーフアン島とウマン島の調査で、最近起きた四件の自殺についての情報を得ている。そのうち一例は、二十六歳の独身女性、あとの三例は、いずれも二十前後の独身男性である。後者の自殺の動機は、働かないので父親に注意された（二例）、酒を飲んで兄にしかられた（一例）というものである。前者のうちの一例はフェーフアン島で起こり、彼の父親は野菜や果実を栽培、販売して生計をたてていた。彼は長男で父親の仕事を手伝わずに、友人と玉つきなどをして遊んでいた。父親が酒に酔ったときに、弟や妹のいるままで自分の仕事を手伝うように注意したのである。彼は翌朝、パイナップルをとりに行くと言って家を出て、山で首を吊ったといわれる。

トラックで自殺の調査研究が続いているヘーゼル神父とルービンスタインの報告によると、自殺例の典型的な動機として、母親にしかられた、親に大学へ進学するのを拒否された、父親からビールを買い金を貰えなかった、姉に酒を作るイーストをかくされた、兄にうるさいといって叱責されたなどをあげている。⁽¹⁹⁾これらの例はいずれも、近親者から非難されたり、彼らに要求を拒否されたりしたことが自殺の大きな動機になっていることを示している。そして、自殺者の多くはモエン島でなく、周辺の島、つまり農耕従事者家庭でみられる。ルービンスタインは、トラックの若者の自殺の社会的・歴史的背景として、戦後における伝統的な男子集所の消滅と近代化（アメリカ化）にもなつて若者が指向する個人主義的な生き方にたいし、それを受けいれる社会・経済的基盤が形成されていないという見方をして⁽²⁰⁾いる。

私は、若者の自殺という最近の現象を、伝統的な人間関係が変質してきたことに根ざしていると考えている。トラックでは母系出自集団が生産手段を共有する団体として機能し、母系の女性成員が共住し、大家族を形成していた。そこでは生計を維持するうえで多くの働き手（婚入男性など）があり、仕事の分担が可能であった。若者には比較的自由な時間を送ることが容認されてきた。また、父親が成年に達した息子を指示したり、叱責することは忌避されていた。⁽²¹⁾しかし最近では、母系出自集団の極少化が進み、一家族（核家族）が生計単位となり、生業活動における労働力も父親だけでまかないきれなくなつてきている。そのため、父親は息子の労働力を期待することになる。

同性キョウダイ間で、兄は弟の行動に責任をもち庇護する立場にあり、弟は兄の命令に従うのが伝統的な関係であった。異性キョウダイ間では、兄弟が姉妹を困らせたり、怒らせたりすることは男として

恥であった。このような伝統的人間関係からみれば、前述した自殺の動機の多くは、その行動規範からはずれているといえよう。生計単位としての家族の個別化が進行する現在のトラック社会において、若者だけが伝統的価値観にもとづいて行動することは不可能である。自分の時間とエネルギーとを自由に費やせた若者は、消費経済の進行にともない、生業活動では働き手として、また現金収入を得る労働者として期待され、社会体制に組みこまれるようになった。そのさい、若者のほうは伝統的価値観に固執し、年輩者は社会の変化に適應する、という現象が今日のトラックの状況である。

トラック社会はここ百年間のあいだに、スペイン、ドイツ、日本、アメリカと四つの異なる文化と接触してきた。そして、いずれの関係においても被統治者という地位におかれた。しかし、外国支配から離脱するにいたり、トラック社会は伝統的価値観の出現と伝統的社会制度の消失という現象を顕在化させた。前者は、一世紀前まで若者の行動を支えていた「攻撃性」「勇敢さ」にたいする価値の再現であり、後者は母系出自原理にもとづく集団編成方式の変質・崩壊である。そのような状況に対応するトラックの若者の生きかたは、飲酒の威をかりて「男らしさ」を誇示する男性と、人間関係の軋轢によって自殺する男性とに両極に分かれる。一九世紀末にトラックで生活した森小弁は当時のトラック人を、「羊のような柔順さ」と「猛獅の性にたちかえる」との性格をあわせもっているとの確に指摘した。その表現は、現在トラックで起きている若者の行動様式をも説明していると解釈できる。

10 母系社会の男と女

母系社会に生きる男性は、母系の出自関係と姻族関係の網のなかで板ばさみの境遇におかれる。男性の社会的地位のその対立が母系パズルである。イギリスの人類学者ヴィクター・ターナーは、アフリカのンデンプ社会ではそれが「社会的不調和」の根底にあることを指摘している。そして、その矛盾が社会的・儀礼的ドラマの主テーマとして、くりかえし演じられるとも述べている。⁽¹⁾この母系パズルの解消法をいかにさぐりあてるかが男性に課せられた生きかたともいえよう。妻方居住婚のサタワル社会で、男性は自分の母系出自集団と妻や子ども、それらの集団との関係をどのように調整しているのであろうか。

母系パズルの解消法

サタワルの母系イデオロギーは、「肉を一つにする」という意識のもとに、母系の出自による集団編成、生産手段の共有と生産物の共同分配・共同消費というかたちで顕在化する。そして、母系出自集団

の財や集団の特権や地位は、母系の相続・継承法にもとづいて次世代へとうけつがれてゆく。一方で、男性が土地などの財の一部を自分の子どもに贈与・相続させる慣行をあわせもっている。多くの母系社会では、男性が自分の手づくりあげたものや独力で獲得したものは、彼の自由裁量で処分することを認めている。しかし、母系集団の共有財である家屋・土地、樹木については、父から息子（娘）への相続を許す社会はほとんどない。その点で、サタワルの父—子相続制は、特徴的な制度であるといえよう。これは、男性と彼が父としてともに生活し育てあげる子どもとのつながりを公認し、自分の子と姉妹の子（甥・姪）とのあいだでおこる「愛の葛藤」をやわらげる方法でもある。この制度は、母系パズルの一つの解決法ともいえよう。

サタワルの父—子相続制は、他方において母系集団間で食料資源を融通しあう手段になっている。小さな島社会においては、食料資源の利用、開発には限度がある。集団の人口が増加したとしても、原野を開墾し、食料を確保できる土地はない。また、集団の人口も、女性成員数やその出産能力によって一定ではない。この制度は、集団から婚出する男性が、自分の食いぶちと、生まれてくる自分の子どものための食料資源とを贈与するものである。したがって、人口の減る集団が、人口の増加する集団に財を譲渡することになり、集団人口と食料資源のバランスをたもつ機能をはたしている。

母系社会における男性の権威の配分についても、サタワルでは、父親としての立場、母方オジとしての立場が拮抗しない手だてをつくりあげている。父親としての男性は、他人の干渉をうけることなく、自分の責任のもとに子どもに影響力をあたえ、養育する権限をもっている。ただし、子どもが成人するまでの期間という条件がつく。母方オジとしての男性は、母系集団の成人した下位世代者、とくに姉妹

の子にたいしては絶対的な支配権をもつ。男性がもつそれらの權威や支配権は、別の観点からすれば、男性が家庭的領域（妻との家族生活）と公的領域（自分や姉妹の母系出自集団）とにわりふられているともいえる。いいかえれば、母系社会において相反する存在である男性は、子どもの成長段階にあわせて、その權威をつかいわけることができるのである。これが、母系パズルを解く、二つめの方法である。三つめの解決法は、男性が妻の集団に婿入りしたとしても、自分の集団にたえず気を配り、問題がおきれば出かけられることである。つまり、男性は婚出後も自分の集団の本拠地の近くに住める状況にある。この居住地の近接性によって男性は自分の姉妹やその母系集団の統率者としての役割をはたせるのである。それらの三要因が社会的に機能するかぎりにおいては、サタワルの母系制は構造上の矛盾を克服しうる集団編成の原理といえる。

私が島を離れるとき、酋長は「人口が六百人になると、食べもののことで争いがおきる」と語っていた。この半世紀でサタワルの人口は、一・四倍に増加した。それはキリスト教の受容後、人口を抑制する伝統的方法を放棄させられたこと、またアメリカの援助による医療、福祉制度が整備されたことによる。

産業基盤が未発達な社会の人びとは自給的生産活動にもとづく消費経済に依存して生活するしかない。島の食料資源の管理者としての酋長にとっては、人口の増加という動向が何にもまして悩みの種である。人口が三倍にもなったトラック社会では、現在、土地共有体としての母系集団が崩壊の危機に直面している。それは、母系集団の男性たちが、共有地を分割して彼らの子どもに相続させたからである。つまり、母系相続を優先させながらも、部分的な父子相続を認めていた慣行が裏目に出たのである。これ

は、サタワル社会でも、集団の男性成員の数が増加すれば、おのずと歩まなければならぬ道である。

トラックでは、人口増にくわえ貨幣経済の浸透という要因も、母系集団を弱体化させる動因になっている。商店経営者や高額の給与所得者は、現金で他人の土地を購入し、それを彼の母系集団の共有財にするのではなく、子どもとくに息子にすべての土地を相続させるようになった。つまり、男系的父子関係を強調し、伝統的な親族関係を否定する動きである。これが、前章でみた核家族の生活を重視するサラリーマンの生きかたである。他方、この土地の売買は、まったく土地を持たない母系集団をうみ出すことになる。「お金は使えばなくなるが、土地は毎年食べものを恵んでくれるから、土地をけって売ってはならない」というトラックの人びとの土地にたいする考えかたは、人口増加と消費経済が進行する状況下では、説得力のない、実践不可能な価値観になりつつある。

現在のトラック社会で興味深い現象は、母系出自集団が土地やその他の生産手段を共有する単位としては機能しなくなりつつあるにもかかわらず、母系出自の観念が人びとのあいだで強く意識されていることである。その観念は、酋長権の継承、個人の社会的地位、婚姻規制、そして母系出自集団の成員相互の援助など、現実の生活において依然として意義をもっている。それは、最近アイナン（母系クラン）成員の再統合化へ向けて、再認識される傾向にある。

その一つがクランの集会所の建設である。アイナン統合のシンボルとしての意味をもつその建設には最低五万ドルの資金が必要となる。酋長をはじめクランの有力者がクラン成員に資金の提供を求める。この要請に呼応して多くの成員は積極的に現金を出し、ほかのクランの集会所より大きく立派なものを建てることを誇りとしている。もう一つは、自分のクランから知事、連邦議会や州議会の議員を選出し

ようという動きである。これは、選挙のさいにクラン成員が団結することを主目的としており、成員はクランのリーダーの指示に従う。このようにトラック社会においては、生産手段を共有する母系的出自集団の規模が縮小化したにもかかわらず、母系出自の觀念がより強化されてゆくことを、人々の行動のなかにみてとることができるのである。

母系社会の性差

母系社会は、一般に夫婦関係でなく兄弟姉妹関係を核としてなりたつと捉えられている。そのことは、サワル社会における兄弟姉妹間に規定された多くのタブーの存在、姉妹の兄弟にたいする食べものの贈与や表敬行為、相手の性的恥辱をお互いにはらすなどの行動にも示されている。姉妹が兄弟にたいして一方的に敬語を使用するし、一段と低い姿勢（アップウオロ）で接するといった表敬行動をみるかぎりでは、社会的には兄弟が姉妹より優位といえるかもしれない。しかし、性的表現にからむ事件においては、姉妹が兄弟の言動を自分の性器を露わにしてまでかばう行為に、彼女が兄弟を庇護する立場にあることを見ぬくことができる。また、男性は、姉妹に自分のしでかした不始末を見せたり、耳に入れたりすることは恥だと考えている。男性が面目を失うのは、姉妹を困らせる行動をすることである。この面においては、兄弟と姉妹の地位の上下については、簡単に結論をだせるものではない。⁽²⁾

つぎに、サワル社会の男性と女性に割りあてられた社会的役割、つまり性差（ジェンダー）について検討してみよう。⁽³⁾ 1章と8章でふれたように、男性が島外からの資源と富の獲得、女性が農耕を中心



祝日、記念日に行われる男性の棒踊り

とする島からの生産物の入手という対立がみられる。生業活動にみられるその対立は、タブーとむすびついた分業によって、男女がそれぞれ異なる自然環境のもとにある資源を独自に開発、利用することを意味している。そして、島の経済生活は、男性の獲得物と女性の生産物とを、男女間で対等の立場で交換することとなりたっているのである。このことから、男性と女性が経済活動の分野においてそれぞれに自立していると捉えることができよう。そして、女性は自分の集団にしながらにして経済的に自立し、

自分（集団）の子どもを生む。男性はその女性のもとへ「飛んでくる」存在として位置づけられているのである。

このような経済活動における男性と女性の自立という伝統的生産様式は、市場経済にくみこまれることによって、その境界をあいまいにしてきた。まず、コプラの生産・販売である。西欧社会と接触するまでは、ココヤシの実が食料として利用され、その実を採取するのは女性の仕事であった。コプラの商品化にともない生産性を高めるために、ココヤシの木の植栽、その実の収集と果肉の摘出、乾燥という過程に多くの労働力が要求され、男女の共同労働という形態が生まれた。サタワルの母系家族においては、コプラ生産の分野で分業体制は崩れたものの、その販売による収入の共同分配と共同消費の慣行は維持されている。しかし、給与所得者の出現によって、現金を手にするもの（多くは男性）とそ

れに依存するもの（女性）という差異が生じてきた。男性は、自分で手にしたものを独自に処分できるという伝統的なしきたりにのっとり、給料の母系家族での共同分配と共同消費に難色を示すようになってきたのである。これは、男性が、「経済的に自立」したという個人主義的自覚のもとに、父子関係での優先的分配と消費に価値を見いだしたことを意味する。

男性のこうした新しい価値観が実践されれば、女性は夫に依存する妻という地位になり、女性の経済的・社会的自立が失われることになる。しかしながら、前章でみた、トラック社会のサラリーマン家庭におけるように、男性の経済的な自立への道にはまだ多くの障害がある。母系出自集団は変質したとしても、兄弟姉妹の紐帯を核にする共同分配と消費という母系的社会関係の基本は消滅しない。つまり、サワルやトラック社会においては、父方相続、父（夫）方居住の方式へと変化したとしても、父系社会へと移行することにはならないのである。